児童の「家族・家庭の役割期待感」における「家庭生活の実態」及び「家庭科でつけたい力」の影響

入江和夫・岡田安恵*

Influences of Realities of Pupils' Home Life and Willingness to Learn Homemaking on their Expectation of Family Role Functions

IRIE Kazuo & OKADA Yasue *

(Received September 27, 2013)

キーワード：児童、家族・家庭の役割、家の仕事、悩み、家庭科

1．はじめに

子どもは家族の食事や団らんなど親子の触れ合いを通して、愛情や社会規範意識などを身に付け、自立に向けて成長していく。しかし、国民生活白書（内閣府2007）では家族の役割が十分果たせない状況にあることを指摘している。そこには「全員が一堂に集まる時間を十分に持てない家族が増えている」「家族そろって夕食をとる頻度は減少している」「親と一緒に朝食をとっている子どもは半数以下」などがあり、その理由として親の仕事が忙しいこと、子どもの塾通いなどがあげられている。さらに、しつけに関して、「昔と比べて親は自分の子どもに対して社会規範やしつけがきちんとできていない」とする者は約５割を占め、「家の手伝い」をする小学生は６割にしか過ぎない。子どもが育つ中で、家族の役割が最も発揮されるのは「悩み」への対応であろう。過去１年間に悩みや不満があった男子児童は約４割、女子は約半数であり、男女ともに「友だちのこと」がその原因となっている（下開2008）。悩みが深刻化すれば、不登校などの要因になるのではないかと考えられ、全国には２万３千人もの不登校児童がいる（文部科学省2007a）。家族とのかかわりが十分でない家庭生活を解決するには家庭教育力の向上が必要である（佐賀市教育委員会2006）。子どもは健全な家庭生活を通して、あるべき家族・家庭の役割を今後の生活に向けて理解し、期待を抱くのではないかと考えられる。中教審の教育課程部会（文部科学省2007b）では「家庭の教育力が衰えた現状の回復は家庭科が大きな役割を果たさなければならない」とあり、家庭科は大きく期待されている。

平成20年小学校学習指導要領解説家庭編の改善の基本方針に「家族と家庭の役割の基礎的理解」「自己と家庭とのつながりを重視」「家族と家庭に関する教育を重視」が記載されている（文部科学省2008）。ここでは読売世論調査（2005）を参考にした「家族・家庭の役割期待感」について、児童がどのように考えているかを明らかにし、この期待感と児童の「家庭生活の実態」及び「家庭科学習の意欲」がどのように影響を及ぼすのかを明らかにしていく。

＊宇部市神原中学校

2．方法

(1) 調査時期・対象

調査期間は質問紙郵送法により、2006年11月の１ヶ月間で行った。山口県内公立小学校８校の６年生で、空欄などの不備を除いた637名（男子＝314名、女子＝323名）。

(2) 分析方法

分析にあたっては、SPSS Ver12を用いて行った。

3．結果と考察

(1)「家庭生活の実態」

設問は日本家庭科教育学会「家庭生活についての全国調査」(2004)、内閣府（2001）「第２回青少年の生活と意識に関する基本調査」、下開千春（2008）「子どもの悩みや不満と相談相手」を参考にした。

１） 食事、接触時間、家の仕事

食事について、「朝食の相手」「夕食の相手」では設問「朝食（夕食）をだれと食べることが多いですか」(＝朝食、夕食）であり、選択肢「１＝ひとり、２＝子どもだけ、３＝大人の誰かと、４＝家族みんな」の１、２を「子どもだけ」、３、４を「大人と一緒」とした。家の仕事では、設問「家の仕事をしますか（＝家の仕事)、「おうちの人」といっしょに家の仕事をしたことがありますか（＝家族と一緒に家の仕事）では選択肢「１：全くない、２：あまりない、３：少しある、４：非常にある」の１、２を「ない」、３、４を「ある」とした。男女別実人数によるカイ２乗分析を行い、結果を表１に示した。

表１　家の仕事、食事

	家の仕事			家族と一緒に家の仕事			朝食			夕食		
	ない (%)	ある (%)	p[1)]	子ども だけ (%)	大人と 一緒 (%)	p[1)]	子ども だけ (%)	大人と 一緒 (%)	p[1)]	子ども だけ (%)	大人と 一緒 (%)	p[1)]
男子[2)]	19.7	80.3	***	30.6	69.4	***	37.9	62.1	n.s.	7.6	92.4	n.s.
女子[2)]	6.2	93.8		9.6	90.4		44.9	55.1		5.9	94.1	

１）カイ２乗検定：$^{***}p < 0.001$

２）男子：n＝314, 女子：n＝323

「家の仕事」をするでは男子が80.3％、女子が93.8％であり、「家族と一緒に家の仕事」をするでは、男子が69.4％、女子が90.4％であり、女子＞男子であった。男子の場合、家の仕事をする人数に比べて、家族と一緒にする家の仕事は減少していた。「朝食」では、大人と一緒に食事している男子が62.1％、女子が55.1％であり、性差はなかった。「夕食」では男子が92.4％、女子が94.1％であり、ほとんどの児童が大人と一緒に食事をし、性差はなかった。

２） 悩み相談相手と原因

小学校高学年では、子どもたちが心身ともに急激に変化し、悩みを抱え込む時期でもある。設問は「小学生になってから、なやみがありましたか。また、だれに相談しましたか。」であり、「悩みの程度」「家族に相談」「友達に相談」の選択肢「１：全くなかった、２：あまりなかった、３：少しあった、４：非常にあった」の１、２を「ない」３、４を「ある」とし、「家族との

会話不足感」では「自分と家族の会話が不足していると感じることがありますか。」、「悩みの原因」では「その悩みの原因はどんなことでしたか」であり、同じ選択肢で１、２を「ない」３、４を「ある」とした。男女別実人数によるカイ２乗分析を行い、表２、表３に結果を示した。

表２　悩みと家族との会話

	悩みの程度			家族に相談			友達に相談			家族との会話不足感		
	ない (%)	ある (%)	p[1]	ない (%)	ある (%)	p[1]	ない (%)	ある (%)	p[1]	ない (%)	ある (%)	p[1]
男子[2]	57.0	43.0	***	66.6	33.4	***	73.6	26.4	***	84.1	15.9	n.s.
女子[2]	27.6	72.4		48.9	51.1		39.3	60.7		84.5	15.5	

1）カイ２乗検定：$^{***}p<0.001$, n.s. 有意差なし
2）男子：n＝314、女子：n＝323

「悩みの程度」で「ある」とした男子は43.0%、女子は72.4%で女子＞男子であった。悩みを「家族に相談」する男子は33.4%、女子は51.1%で、女子＞男子であった。悩みを「友達に相談」する男子が26.4%、女子が60.7%で、女子＞男子であった。「家族との会話不足感」で「ある」とした男子は15.9%、女子は15.5%で、ほとんどの児童は家族との会話に不足感はなく、性差もなかった。総じて女子の方が「悩み」が多くあり、家族や友達に相談することも女子の方が多かった。

表３　悩みの原因

	友達のこと			家族のこと			勉強のこと		
	ない (%)	ある (%)	p[1]	ない (%)	ある (%)	p[1]	ない (%)	ある (%)	p[1]
男子[2]	61.8	38.2	***	92.7	7.3	**	76.4	23.6	*
女子[2]	27.2	72.8		85.8	14.2		67.2	32.8	

1）カイ２乗検定：$^{***}p<0.001$, $^{**}p<0.01$, $^{*}p<0.05$, n.s. 意差なし
2）男子：n＝314、女子：n＝323

悩みの原因が「友達のこと」とした男子は38.2%、女子は72.8%で最も多く、女子＞男子であり、下関（2008）の結果と同様であった。「家族のこと」が原因で「ある」とした男子が7.3%、女子が14.2%で、少なかったが、女子＞男子であった。「勉強のこと」が原因で「ある」とした男子が23.6%、女子が32.8%で、女子＞男子であった。

３）「家族に相談」の要因

悩みを「家族に相談」できる要因を明かにするため、「家族に相談」「家の仕事」「家族と一緒に家事」「朝食を共にする家族人数」「夕食を共にする家族人数」「家族との会話不足」について男女別に相互相関を行った結果、男子では「家族と一緒に家事」のみに有意な正の相関があり、女子は「家の仕事」「家族と一緒に家事」に有意な正の相関、「家族との会話不足」に負の有意な相関があった。これを参考にして、児童が悩みを「家族に相談」することの要因を重

回帰分析し、その結果を表４に示した。

表４　「家族に相談」の要因

	悩みを家族に相談	
	男子β	女子β
家の仕事		−
家族と一緒に家事	0.140***	0.171***
家族との会話不足		-0.146**
R^2	0.020*	0.054***

ステップワイズ法　* p＜0.05、** p＜0.01、*** p＜0.001
β：標準編回帰係数

男女共に「家族と一緒に家事」をすることが悩みを「家族に相談する」ことの要因になっていた。さらに女子では「家族との会話不足」が「家族に相談」を低下させる要因になっていることがわかった。

(2)「家族・家庭の役割期待感」

１）因子分析

読売新聞（2005）世論調査を参考にし、設問「あなたは、家族や家庭がどういうところであってほしいと思いますか。」とし、選択肢「１全く思わない、２あまり思わない、３まあまあ思う、４非常に思う」の４段階とした。フロア効果（平均値－SD）の項目はなく、天井効果（平均値＋SD）があった４項目はそのまま残して、「家族・家庭の役割期待感」として因子分析（主因子法）を行い、結果を表５に示した。

表５　「家族・家庭の役割期待感」の因子分析

	因子Ⅰ「守り育てる所」（α＝0.817）	因子Ⅱ「心が安らぐ所」（α＝0.817）
1　社会から守ってくれる所	0.734	0.013
2　子どもを産み育てる所	0.734	-0.011
3　しつけや教育をする所	0.725	0.009
4　看護介護をしてくれる所	0.627	-0.016
5　悩みの相談ができる所	0.463	0.175
6　安心して生活できる所	-0.071	0.837
7　安定した生活が送れる所	-0.02	0.826
8　家族が仲良く暮らす所	0.068	0.679
9　帰宅時にほっとする所	0.193	0.508
因子間相関	Ⅰ	Ⅱ
Ⅰ	1	0.643
Ⅱ	0.643	1

＊主因子法（プロマックス回転後の因子パターン）

因子Ⅰは「子どもを産み育てる所」「しつけや教育をする所」などの項目があることから“守り育てる所”とネーミングした。因子Ⅱは「安心した生活が送れる所」「家族が仲良く暮らす所」などの項目があることから“心が安らぐ所”とネーミングした。因子Ⅰの項目の平均値を算出し、下位尺度得点「守り育てる所」「心が安らぐ所」を得た。「守り育てる所」のｔ検定は男子

平均値（n=314）2.81、女子平均値（n=323）3.03, t 値（620.7）＝4.73, p ＜0.001で、女子の意識が高かった。「心が安らぐ所」の t 検定は男子平均値（n=314）3.30、女子平均値（n=323）3.61, t 値（535.8）＝6.248, p ＜0.001で、女子の意識が高かった。

(3) 「家庭科でどのような力をつけたいか」

1）因子分析

アンケート実施の小学校教諭から児童に理解できるような説明を加えながら行った。設問「あなたは家庭科でどのような力をつけたいと思いますか」とし、「1全く思わない、2あまり思わない、3まあまあ思う、4非常に思う」の4段階で調べた。項目は「1家事についての知識や技能（＝家庭生活の知識・理解）」「2.1の背後にある原理や原則、科学的認識（＝原理や原則、科学的認識）」「3日常生活の礼儀やマナー（＝同左）」「4家事に進んで参加しようとする態度（＝家事参加態度）」「5賢い消費者について（＝賢い消費者）」「6家庭内の人間関係、家族関係（＝家庭内の人間関係）」「7男女の問題や性教育（＝同左）」「8今日の日常生活のさまざまな問題について考え、どうしたらよいか見通しを立てる力（＝見通しを立てる力）」を含む14項目について、主因子法による因子分析を行った。フロア効果（平均値－SD）の項目はなく、天井効果（平均値＋SD）があった4項目は重要だと考えたので、そのまま残して分析し、因子負荷量0.40未満の項目を除いた結果を表6に示した。

表6　因子分析（主因子法）

	因子Ⅰ「家庭科でつけたい力」（α＝0.902）
問1110具体的な介護の仕方	0.725
問119高齢者の生活と福祉	0.704
問1113具体的な世話の仕方	0.684
問114家事参加態度	0.677
問1112保育	0.676
問113日常生活の礼儀やマナー	0.674
問1111環境教育	0.668
問118見通しを立てる力	0.661
問116家庭内の人間関係	0.641
問112原理や原則、科学的認識	0.627
問111家庭生活の知識と技術	0.603
問115賢い消費者	0.569

1因子構造であり、クロンバッハのαは0.902であった。質問項目から考え、因子名を“家庭科でつけたい力”とし、下位尺度得点「家庭科でつけたい力」の t 検定は男子の平均値（n=314）2.81、女子の平均値（n=323）3.03,　t 値（620.7）＝4.73, p ＜0.001であり、女子の意欲が高かった。

(4) 「家族・家庭の役割期待感」の相関・要因

1）相互相関

「家庭生活の実態」（＝「家族の仕事」「家族と一緒に家事」「朝食を共にする家族人数」「夕食を共にする家族人数」「家族との会話不足」「悩みを家族に相談」）、「家庭科でつけたい力」、「期待する家族・家庭」（＝「守り育てる所」「心が安らぐ所）の相互相関を行った結果（上段は男子、下段は女子）を表７に示した。

表７　相互相関

	家の仕事	家族と一緒に家事	朝食を共にする家族人数	夕食を共にする家族人数	家族との会話不足	悩みを家族に相談	家庭科でつけたい力	守り育てる所	心が安らぐ所
家の仕事	−	.508 (**)	0.091	.167 (**)	−0.035	0.065	.167 (**)	.126 (*)	.249 (**)
家族と一緒に家事	.424 (**)	−	.119 (*)	.138 (*)	−0.044	.140 (*)	.307 (**)	.205 (**)	.220 (**)
朝食を共にする家族人数	0.021	.119 (*)	−	.292 (**)	−0.097	0.059	0.032	0.035	.129 (*)
夕食を共にする家族人数	0.041	0.017	.164 (**)	−	−0.111	0.069	−0.019	0.034	0.084
家族との会話不足	0.039	−0.068	-.157(**)	-.194(**)	−	0.026	-0.018	-.111 (*)	-.144 (*)
悩みを家族に相談	.134 (*)	.181 (**)	0.054	0.087	-.158(**)	−	.228 (**)	.204 (**)	.144 (*)
家庭科でつけたい力	.210 (**)	.308 (**)	0.069	0.105	-0.105	.222 (**)	−	.582 (**)	.512 (**)
守り育てる所	.136 (*)	.202 (**)	.121 (*)	0.109	-.155(**)	.236 (**)	.639 (**)	−	.628 (**)
心が安らぐ所	0.103	.242 (**)	.190 (**)	.215 (**)	-.213(**)	.207 (**)	.462 (**)	.496 (**)	−

* $p<0.05$、** $p<0.01$
上段＝男子、下段＝女子

「家の仕事をする」について、男子は「守り育てる所」「心が落ち着く所」と正の相関があるが、女子には「守り育てる所」のみに正の相関があった。「家族と一緒に家事」について、男女共に「守り育てる所」「心が落ち着く所」と正の相関があった。「朝食を共にする家族人数」について男子では「心が落ち着く所」と正の相関があり、女子は「守り育てる所」「心が落ち着く所」に正の相関があった。「夕食を共にする家族人数」について、男子に相関がなく、女子は「心が落ち着く所」のみに正の相関があった。「家族との会話不足」では男女共に「守り育てる所」「心が落ち着く所」と負の相関があった。男女共に「悩みを家族に相談」「家庭科でつけたい力」は「守り育てる所」「心が安らぐ所」と正の相関があった。

2）重回帰分析

児童の家族・家庭の役割期待感「守り育てる所」「心が安らぐ所」の要因を明かにするために、有意な相関があった項目について男女別に重回帰分析を行い、結果を表８に示した。

表8　「家族・家庭の役割期待感」の要因

	家族・家庭の役割期待感			
	守り育てる所		心が安らぐ所	
	男子β	女子β	男子β	女子β
家の仕事	n.s.	n.s.	0.164***	
家族と一緒に家事	n.s.	n.s.	—	n.s.
家族との朝食状況		n.s.	n.s.	0.120*
家族との夕食状況				0.127**
家族との会話不足	-0.100*	n.s.	-0.130*	-0.124*
悩みを家族に相談	n.s.	0.099***	n.s.	n.s.
家庭科でつけたい力	0.580***	0.617***	0.483***	0.428***
R^2	0.349***	0.417***	0.307***	0.274***

ステップワイズ法　*p＜0.05、**p＜0.01、***p＜0.001　空欄＝相関なし
β：標準編回帰係数

「守り育てる所」の役割期待感に注目する。男女共に「家庭科でつけたい力」によって高まり、男子では「家族との会話不足」によって、この期待感は低下し、女子では「悩みを家族に相談」することで高まることがわかった。

「心が安らぐ所」の役割期待感に注目する。男女共通に「家族との会話不足」がこの期待感を低下させている。男子では「家の仕事」の程度が多ければ、この期待感は高まり、女子では「家族との朝食」「家族との夕食」の人数が多いほど「心が安らぐ所」の期待感が高まることがわかった。

4．まとめと提言

(1)「家の仕事」をしている児童は8割以上であり、特に女子はほぼ全員が行っていた。「家族と一緒に家事」では男子の「家の仕事」よりも少なく、女子は9割以上が行っていた。朝食を大人と一緒に摂る児童は約半数強であったが、夕食はほぼ全員が大人と一緒に摂っていた。

(2)「悩みがある程度」に関して女子は7割、男子は4割であった。「家族に相談」する女子は約半数、男子は3割であった。「友達に相談」する女子は6割、男子は2割強であった。「家族との会話不足感」は男女とも1割強であった。悩みの原因が「友達のこと」であるとした女子は7割、男子では3割強であった。悩みが「家族のこと」とした女子は1割強で、男子は1割未満であった。「勉強のこと」とした女子は3割、男子では2割であった。「悩みを家族に相談」することに関して、男女の「家族と一緒に家事」が正の要因であり、女子の「家族との会話不足」が負の要因であった。

(3) 児童の「家族・家庭の役割期待感」について因子分析を行い、下位尺度得点「守り育てる所」「心が安らぐ所」を得た。t検定の結果、これらの期待感は女子の方が高かった。

(4)「家族・家庭の役割期待感」の要因を明かにするために、重回帰分析を行ったところ、男

女共通して、両期待感を高めているのは「家庭科でつけたい力」であり、男子では「悩みを家族に相談」することが「守り育てる所」の期待感を高め、女子では「家族との朝食」「家族との夕食」で一緒に食べる人数が多いほど、「心安らぐ所」の期待感が高まることがわかった。「家族との会話不足」は男子の守り育てる所」の期待感、男女の「心安らぐ所」の期待感を低下させる要因であった。

今回の結果を小学校家庭科の学習指導要領から一考する。家族・家庭の役割期待感を高める男子の「家の仕事」、女子の「家族との朝食」「家族との夕食」は内容Aに該当する。また、負の要因「家族との会話不足」、逆に言い換えれば「家族との会話充実」も内容Aに関する学習に含まれる。すなわち、学習指導要領の内容Aに関する学習を充実させることで、児童は健全な家庭・家族の役割を理解し、その期待感を高めることができるのであり、このことを念頭におきながら、家庭科の授業を行うべきである。

男女の家庭機能の期待感を高める最も大きな要因は「家庭科でつけたい力」、すなわち家庭科全般にわたって内容を身につけたいとする意欲である。すなわち内容A、B、C、Dを児童の家庭生活の実態に絡めることで、家庭科役立ち感→学習意欲→役割期待感にリンクすると考えられることから、その方向をもった教材開発が重要である。

さて、もうひとつ、「悩みを家族に相談」することは女子の「守り育てる所」の期待感を高める要因になっている。しかし「悩みを家族に相談」に関して学習指導要領には該当する箇所が見つからない。逆に「学年の目標(1)「してもらう自分」から「できる自分」へと成長していることに気付き」がある。小学生女子の7割が悩みを抱えていることから考えれば、「してもらう自分」が大切であり、画一的に「できる自分」を意識させてはいけないのではないだろうか。さいたま市教育委員会による児童・生徒の自殺に関わる調査で「生きていてもしかたがないと思うか」と尋ねたところ、「いつもそうだ」との回答が小学生で975人（4.3%）」いた（読売新聞　2013）と報道されている。これは30人学級に1人の割合で存在していることを意味している。小学生5、6年生はまだ「してもらう」子どもであり、「できる自分」を獲得していく最中であることを教師は把握し、「悩みを親子で共有」してこそ、命が救われることを念頭に置きながらこれを教材にした家庭科学習は重要である。今後、教材開発を行っていきたい。

参考文献

内閣府（2007）.「平成19年版、国民生活白書—つながりが築く豊かな国民生活—」
http: //www5. cao. go. jp/seikatsu/whitepaper/h19/10_pdf/01_honpen/
下開千春（2008）:「子どもの悩みや不満と相談相手」Life Design Report 第一生命経済研究所
文部科学省（2007a）:「平成19年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」（小中不登校）について」
http: //www. mext. go. jp/b_menu/houdou/20/08/08073006. htm
文部科学省（2007a）:「中央教育審議会　初等中等教育分科会　教育課程部会　技術・家庭、情報専門部会（第6回）　配付資料　資料2」
文部科学省（2008）:「小学校学習指導要領解説　家庭編」
読売新聞（2005）:「男性の6割「家庭優先」　読売新聞社「家族」世論調査2005年1月15日　東京朝刊」
日本家庭科教育学会（2004）:「家庭科で育つ子どもたちの力—家庭生活についての全国調査か

ら」 明治図書出版.
内閣府（2001）:「第２回青少年の生活と意識に関する基本調査」http: //www8.cao. go. jp /youth/kenkyu/seikatu2/top. html